

シート番号	7101-09	名称	人見浦開発記念碑
分類	記念碑	場所	人見 人見神社
小分類	公共事業碑	メッシュ番号	1715
年号	和暦：昭和48年8月10日 西暦：1973年		
形状	厚板型		
サイズ	本体 302×86×71 台石 63×182×147 c m		
画像番号	7101-09-01	画像番号	7101-09-02 (正面)
 <p style="text-align: center;">人見浦開発記念碑 千葉県知事従五位薫一等 柴田等書</p>		 <p style="text-align: right;">人見浦開発記念碑建立由来</p>	
		画像番号	7101-09-03 (裏面)
		 <p style="text-align: right;">君津漁業協同組合芳名</p>	
<p>コメント；裏面は組合員名刻印（省略）。 碑文は次ページ参照。</p>			

人見浦開発記念碑建立由来

房総の霊峰鹿野山の山麓より発する小糸川の河口一帯を人見浦と称しているが早くから文明開化の門戸になった江戸時代文政年間近江屋甚兵衛翁は河川の海に注ぐ所を求めて移住し海苔養殖を開始して開祖となった。以来百五十年この人見浦が上総海苔の発祥地となつて内湾一帯に広まり北は浦安より南は富津岬に至る延々八十軒の東京湾東沿岸に海苔養殖業が普及され半農半漁の生活向上に大きく貢献した人見浦はこうして遠浅の海のまま江戸時代から明治大正昭和の時代に亘り沿岸漁民生活の舞台になつてきたが昭和二十年八月十五日太平洋戦争の終結を迎えた当時の君津町には海軍航空廠八重原工廠の所在地であつた其の關係で治安が乱れ住民の生活は不安の連続であつたその頃農林省の職を奉じて農政指導の要職にあつた鈴木誠一氏が郷土に帰る成公選の初代町長に就任した氏は戦後の事態を深く憂慮し町の治安ならびに経済復興対策を検討した結果小糸川水質源利用に着目海岸を埋立てここに工業を誘致し農山漁業と工業との調和を基本とした農工商全主義の町づくりで君津町の大改造を決意した、しかしながら当時の君津町の財政能力では自力での実行は不可能であつたため柴田等知事に君津町の窮状を訴え具体的な街づくりの構想を説明しこの実現に協力を要請した幸にも柴田知事はこの構想に共鳴され積極的に実現を約束されたこの会談が発端となり県当局は現地調査を行ない紆余曲折の後昭和三十五年十月十九日君津漁業協同組合ならび坂田畑沢小浜桜井の五漁業協同組合に対して公文書を以て漁業権譲渡の申し入れがあつた、漁業権を県に譲渡する問題について人見浦を基盤にした君津漁業協同組合ではその承認の是非に日夜紛糾が続いたが時の君津漁業協同組合長白井千代吉氏は問題を重視して同組合役員の中野一郎中野岩男平野久次郎長嶋伝五郎天笠新司茂田正巳守寿平野長蔵対策委員長茂田育三氏外委員三十七名顧問守彰三守市五朗高浦惣四郎相談役秋元國次郎坂井有斎藤清次郎の諸氏と熟慮討議を重ね先進地

並に諸般の調査検討を経て組合員二百十七名の同意を得てついに昭和三十六年八月十日千葉県庁に於て漁業権譲渡の調印式が行われ柴田知事と白井組合長岸町長其他関係者立合のもとに挙行された歴史的なこの調印式が契機となつて八幡製鐵株式会社（現新日本製鐵株式会社）の進出が確定しやがてこの地一帯の埋立工事も開始され昭和三十六年九月一日同千葉建設事務所が設置され同四十年五月二十六日坂田漁業協同組合の漁業権譲渡の調印式が行われつづいて他の三組合も調印し同四十三年十一月君津製鐵所第一溶鉱炉の火入式が行なわれ君津町の建設も活発になつた以来調印式後十年余を経た今日人見浦一帯は工業都市化を急ぎ終戦当時に憂慮された諸問題の解決は軌道に乗り経済的にも文化的にも躍進向上し昭和四十五年九月君津町小糸町清和村小櫃村上総町の五ヶ町村が合併し新生の君津町となり同四十六年九月には市制を施行し君津市に昇格する等興隆進展の跡頭著となり飛躍の一路を歩んでいるこうした成果は農政上の学理経験を基礎とした鈴木誠一町長の町づくりの構想と柴田知事の終始誠意を以て支援された結果でありさらに其構想を継承した歴代の岸周治鈴木菊治郎両町長等が至誠一貫この町づくりに尽力された功績と白井千代吉組合長及び人見大和田地区の組合員であつた人々が昭和三十六年八月漁業権を他に先駆けて県に譲渡し新時代を切り開いた格別の行為が現在の君津市をつくり将来益々大きく躍進する基盤をつくつたのであるこの地域的産業転換の大改革をなし遂げた革新的英断に対し深甚の感謝の意を表すると共に地域の人人の功績を後世に伝えるため石に刻んでふるさとの森人見神社の境内にこの記念碑を建立するものである

千葉県立上総博物館長 高橋在人 撰文

渡部希峰 謹書

白井秀光 謹刻